

初めての海外国際会議とアメリカ体験記



若 者

大 家 利 彦*

それはある日突然…

それは7月のある日、教授室に呼ばれたことに端を発する。

教授：「この会議に出す内容は、君の研究内容じゃないのか？」

私：「もちろんこの中には含まれていますが、それが何か？」

教授：「なら、君が発表したらどうかね。」

私：「行っても良いのでしたら、やらせて頂きます。」

という具合に、いとも簡単に初めての海外国際会議での発表が決まってしまった。私にとって初めての海外渡航の目的がよりもよって国際会議での発表になろうとは…

今回、参加した会議はLIA(アメリカレーザー協会)のICAREO'92(レーザーエレクトロオプティクスに関する国際会議)で、10月25日から4日間、アメリカ、フロリダ州のオーランドで開催された。拙文ながら本紙面をお借りして、この会議およびその前後のアメリカ滞在中の体験と感想を紹介したい。

会議前、ニューヨークにて

かくして、10月21日の夕方、不安と希望を胸に、大阪空港を飛び立った。不安はまだ発表用原稿が未完成なこと(このため、パソコンとプリンタを携行する羽目になり、荷物が8kgほど増えてしまった)である。



*Toshihiko OOIE
1962年11月7日生
大阪大学大学院工学研究科博士後期課程修了
現在、通商産業省 工業技術院
四国工業技術試験所、工学博士、
溶接工学(レーザー加工)
TEL 0878-67-3511(代)

サンフランシスコに到着し、飛行機から降りた途端、警官に呼び止められてしまった。どうやら家出少年と間違えられたようで、先が思いやられた。ここで入国手続きをすませた後、国内線でJFK空港に到着したころには夜もすっかり更けていた。

ニューヨークでは丸1日かけてマンハッタン島内を歩き回ったが、見るもの聞くものすべてが新鮮に感じられた。同じ高層ビルでもそれぞれに形が異なり、あるいは装飾がほどこされ、個性を主張しているように見えた。同じ都会でも四角四面のビルのみが立ち並ぶ東京とは大きな違いである。ニューヨークでのこの散策は今回の渡米中のもっとも貴重な体験の一つだったと思う。同じ英語を話すにしても、日本で外国人と話している場合には、話し疲れて横を向けば日本人がいてひと休みできる訳だが、ここでは周囲にだれもいない。日本からの異邦人(そう思っていたのは私本人だけかもしれない。ニューヨークでは東洋人は珍しくないのだから…)に気軽に話しかけてくる見知らぬ紳士、黒人青年等々。会議にそなえて英語に慣れるにはもってこいであった。

正直言って、実際に行くまでは私がニューヨークに抱いていたイメージは「コンクリートジャングル」、「多発する犯罪」、「個人社会」などと、あまりいいものではなかったが、その先入観も一日で消え去ってしまった。我々海外からの異邦人にとってはこれほど入り込みやすい都市はそう多くないと思う。ただし、夜間は多数のパトロールカーがサイレンをならしながら走り回っており、昼間とは全く別の街のようだった。

ICALEO'92 についての印象

会議会場のあるオーランドに到着したのは日本を出発して5日目(実際には時差の関係で6

日経過している)の10月25日である。秋も終わりに近づき、木の葉が舞散るニューヨークとはうってかわって、ここではシャツ1枚になっても暑すぎるほどの陽気である(ホテルのプールでは泳いでいる人も多かった)。

会場となったホテルは非常に立派なものであったが、会議会場を見たときには、意外に規模が小さいなという印象を受けた。というのは、私がこれまでに参加した、日本での国際会議では、3つ程度のセッションが同時進行し、広大な展示ブースが併設されていた。これに対して今回のICALEOでは、セッションは本会議ひとつだけで、併設されている展示ブースも比較的狭いものだった。しかしそのおかげで参加者はその気になればすべての講演を聞く事ができ、また、疑問点は十分に議論することが可能となっていた。会議全般にわたって非常に活発な議論が行われており、白熱するあまり、制限時間を超過することも多かった。

講演を聞いた最初の印象は「は、早い!」。さすがに英語圏での会議である。話す速度が全く違う。やはりこれまでの日本での国際会議とはひと味ちがっている。それでも必死になって聞いているうちによりやく断片的に聞き取れるようになってきた(時折めぐるってくる日本人の発表が唯一の休憩時間となる)。内容を聞き取るのに必死の我々日本人と対照的に外国人講演者は発表を楽しんでいるようにも見受けられ、多数のジョークを間に入れるなど、同時に聞いて人をも楽しませようとしていた。中には壇上で缶ビールを一气飲みするパフォーマンスを演じる人もいた位である(P〇〇ellさん!あなたのことですよ)。私はといえば、質疑応答でつまりく他の日本人講演者をみる度に、後に控えた自分の発表を思い、気分が重くなっていた。

会議出席者はやはり米国内からが多く、大学、公的研究機関をはじめ多くの企業からの参加が見られた。日本からも多くの参加者があったらしいが、残念ながら会議場ではほとんど見かけなかった(途中の飛行機で会った方々はいったいどこへ消えたのか…)

講演前夜～当日

私の講演は会議の3日目の午後3時であった。発表はエキシマレーザ加工部の付着物生成に関するもので、発表のための原稿は日本を出発して以来、少しずつ書いていたが、仕上がったのは発表前日の夕方、今から思えば冷や汗ものだった。それから図面と照らし合わせながらの発表練習が始めることができた。1回15分の原稿を何回も繰り返して読み返した。そのかいあってか、講演自体は非常に順調に進めることができ、その後の質疑応答も、大幅に制限時間をオーバーしたことを除けばほほうまくいったと思う。一番うれしかったのは、私の発表に多数の研究者が興味を持ってくれ、発表後に議論することができたことである。

げんきなものでも自分の発表が終わると、それまでの頭痛もうそのように消え去り、一気に気分が軽くなっていた。

その夜は、壇上で缶ビール一气飲みを演じたP〇〇ell氏に夕食をご馳走になったが、一緒に食事してまたびっくり。信じがたいほどの食欲である。アメリカ風味付けに拒絶反応を起こしかけている私の何倍もの量を一气に平らげて平気な顔をしていたのには驚かされた。

会議終了、そして日本へ

会議終了後、オランダからカナダのオタワに移動し、レーザメーカを訪問、討論したのち、私は単身帰国の途についた。途中、乗換地のトロントでは飛行機に乗り遅れそうになったし、1泊したシカゴでは荷物手続きで困っているところを日系2世の窓口嬢に助けてもらったり(本当にありがとうございました)しながらも無事に日本に帰り着くことができた。

今回の会議で、多数の研究者と知り合え、さらに私自身の心の中の国境をとりはらうことができたのは非常に大きな収穫だったと思う。これからも機会があれば参加していきたい。

最後に、今回の会議参加を可能にして下さった、大阪大学工学部、丸尾教授に感謝したいと思います。